

24 江戸時代の梅毒をめぐる意識について

鈴木 則子

江戸時代に梅毒が蔓延していたことは、これまでの梅毒史の先行研究が度々指摘してきたことである。では江戸時代の人々は、ことさら珍しくもない病となった梅毒について、どのような意識を抱いていたのだろうか。

中神琴溪は『生生堂医譚』（二七九五年）の中で、四〇年以前は梅毒を「大麻風」のごとく思い、病人も病を羞じて交際を絶つたものだが、近頃は僧侶まで病むようになって、百人中六、七十人も罹患しているために人々が羞じなくなってしまうたと嘆息する。そして「江戸の水道の水を飲まぬと梅毒を病まぬは男の内にあらず」とさえ言われると述べる。だが梅毒自体は、近年は古に比して症状は十倍も激化し、軽い薬では治療効果を得られないと言う。

琴溪の『生生堂治験』（一八〇四年）は、ある少年が両親に病気がばれると怒られることや、世間に笑われることを恐れて、密かに売薬で自己治療していたために悪化させ、片目を失明してしまったことを載せる。

確かに琴溪の著書から四〇年前、すなわち一七五〇年代以前の医学書では、人々の梅毒に対する恐怖を確認することができる。香月牛山著『牛山活套』（一六九九年自序、一七七九年刊）は、「楊梅瘡」は最終的に廃人になるために「人之を悪み嫌ふこと、大風に類する也」と記す。

琴溪が指摘する、梅毒への視線が恐怖から色事にまつわるダンディズムや嘲笑に変わった四〇年間、つまり一八世紀前半とは、古方派草創期の大家・後藤良山と、その弟子香川修庵による梅毒治療が展開する時期である。『先哲医話』（浅田宗伯）は良山が、「今世は梅毒が筋骨を侵し、元気を塞ぐ」ことが多いので、病人を診るにはまず梅毒の経験の有無を尋ねる必要があると述べたと記す。良山・修庵師弟が城崎温泉の梅毒に対する有効性を主張して以後、梅毒の温泉治療が普及した（第一〇四回

日本医史学会報告「江戸時代の温泉と梅毒」参照。

一八世紀後半からは梅毒専門医書の刊行も盛んになる。橘尚賢『黴瘡證治秘鑑』（一七七二年自序）をはじめとして、幕末までに二〇冊ほどの梅毒医書を確認することが出来る。以上のように一八世紀とは、梅毒の蔓延に伴って、日本医学が梅毒に真剣に取り組み始めた時代と言えよう。

いっぽう一八世紀は、都市部において遊里が拡大する時期でもあった。宝暦年間（一七五一〜六四年）に吉原の太夫・揚屋制度が廃絶し、文化の中心でもあった吉原は安直な売買春の場へと変質した。京都では十八世紀後半、祇園に島原からの出向の遊女屋が設置され、手軽に遊べる遊所として繁栄していく。江戸・大坂周辺でも十八世紀後半に幕府の飯盛女雇用規制が緩和された。

遊女の性が安く大量に消費される時代を迎えて、医学書の中の病因論にもまた新たな変化が確認できる。従来、梅毒の病因は、伝染性のものと「自発」のもの、そして両親からの先天的な「遺毒」など、いくつかの要素が考えられるのが一般的であった。この内「自発」につ

いては、男女に関係なくその人の体質や生活態度、環境によって発病すると考えられた。しかしながら例えば本間棗軒は『瘍科秘録』（一八三七年自序）において、梅毒は娼婦の陰中に濁液が於滞して生ずる病であり、娼婦以外の患者の病因は皆伝染であると述べる。そしてかつては娼楼が少なかったので梅毒が少なかったが、近年は娼婦の増加によって梅毒が蔓延したという。彼の病因論には、娼婦の身体そのものへの強い蔑視・卑賤視が介在する。

このように梅毒という病は、医学の場においてもジェンダーバイヤスのかかった解釈をされた病であったと考えられる。

（奈良女子大学生生活環境学部）